

1950年前後における京大学生運動（下） 総合原爆展と京大天皇事件を中心に

福家 崇洋†

はじめに

本論前篇となる「1950年前後における京大学生運動（上）」（以下（上））は、1949年から翌年に至る京大学生運動を京都民主戦線との関係から描き直したものである。とりわけ、京都民主戦線を背景とする学内統一民主戦線派（主流派）の興隆、その後の国際派学生の突き上げによる運動の急進化（前進座事件、円山事件等）と学生処分がその主な内容であった⁽¹⁾。

1951年は、上記の諸事件で打撃を受けた京大学生運動が立て直しを模索する時期にあたる。とくに同学会や日本共産党京大細胞が、日本共産党や全学連といった学外組織と関連しながら、いかにして総合原爆展や京大天皇事件に取り組むことになったのかを本論では明らかにしたい。

すでに総合原爆展及び京大天皇事件については諸資料が掘り起こされ、それらを用いた先行研究も存在する⁽²⁾。特に川合一良氏、小畑哲雄氏ら「原爆展」掘り起こしの会員による諸成果、研究者による聞き取り記録は有益な研究資料となる。あわせて、本論では、『戦後学生運動関係資料Ⅰ』『京大天皇事件関係資料』（京都大学大学文書館所蔵）、the Japanese Modern History Manuscript Collection（フーヴァー研究所アーカイヴズ所蔵）、総合原爆展関係資料（個人蔵）などを用いる。

（上）で見たように、京大学生運動は主流派の

影響が強く、1951年もこの傾向は続いている。ただし、同年夏以降における主流派の主導権確立や武装闘争方針の影響が京大学生運動に一義的に及んだわけではない。そこには京都という地域特有の事情があったことを併せて考える必要がある。1950年の京都民主戦線の影響は翌年も息づいており、それが統一地方選における「民統派」候補の支援や総合原爆展の実施に結実したと本論では考えたい。この軌跡を朝鮮戦争や「逆コース」に抵抗する政治的な民主戦線から文化的な民主戦線への移行ととらえるならば、後者の総合原爆展は当時の学生運動のひとつの到達点であった。本論では、以上の諸過程を描きつつ、この動きがその後の京大天皇事件にいかにつながっていったのかを追っていきたい。

I 政治的民主戦線の再興

1) 「民統派」の進出

日本共産党の1951年は、全面講和運動の呼びかけからはじまっている。同年1月初旬、党臨時中央指導部は全面講和実現に向けた一大国民運動を起こすべきことを提唱した。この党主流派（所感派）の主導下で誕生したのが全面講和愛国運動協議会（全愛協）である。

全愛協は、共産党、労働者農民党、産別、日中友好協会、婦人民主クラブ、関西主婦連合会、大

† 富山大学人文学部准教授

山郁夫、平野義太郎、足立梅市らが中心となって、1月15日に結成された。彼らは、全面講和による平和と民族独立の実現を目指して、講和投票運動を行っていくことになる⁽³⁾。

京大では主流派の影響が強く、1月26日の京大同学会代議員選挙では「民統派」(主流派)の新執行部が選出された。彼らの運動は全面講和要求が主軸で、この場で全面講和投票の全学的展開が圧倒的多数で可決された⁽⁴⁾。

この運動の浸透にあたって大きな役割を果たしたのが『京大平和の戦士』(1月16日創刊)であった。「創刊に当つて」には「われわれの手で全面講和をかちえ、祖国を平和と独立の栄えある勝利に導くべき」⁽⁵⁾とあるうえ、椎野悦朗(党臨時指導部議長)の論説も掲載されたことから、主流派の学内組織によって発行されたと考えられる。

よって、同紙の方針は全面講和運動の推進であり、同紙2号(1月30日)の主張「講和投票は民族存亡の鍵」では「この講和投票こそ、すべての国民がその信教、政治的立場の如何にかゝらず、極少の売国奴を除き、大同団結すべき一大政治決戦」⁽⁶⁾だとして、勝算ラインとなる4000万以上の投票を呼びかけた。

宣伝とあわせて運動も開始され、立命館大生による26日の「全面講和促進、再軍備反対 総けつ起大会」を皮切りに、30日には関西各地で総決起大会が開催された。京大でも河上祭で「全面講和」と書かれた「河上まんじゅう」が売り出された。2月3日には恒例の吉田神社節分祭が開かれ、同学会は「講和アメ」を売ったり、「講和みくじ」を配ったりして、全面講和実現をアピールした⁽⁷⁾。

一方、武井昭夫率いる全学連は、宮本顕治ら国際派の影響が強く、主流派とはやや力点の異なる運動方針を打ち出している。「全学連情報」1号(1月15日)によれば、「全面講和の為の闘いは、平和のための闘いと密接不可分に結びついて居り、平和を守る全人民的な闘いなしに全面講和をかち

とる闘いはありえない」⁽⁸⁾として、平和運動の促進を目指した。

その後、全学連は「全面講和投票運動の展開に関する具体的指示」を打ち出したものの、「反植民地闘争デー及び世界平和協議会開催の二月二十一日を目指して——講和投票運動の第一段階」⁽⁹⁾という文言があるように、運動の目標を反植民地闘争デーに置くことになる。

同様に、京大学生運動でも両面の動きが展開された。まず全面講和要求運動は1月から2月上旬にかけて各学部にも浸透し、「法学部民主勢力結集体たる民主戦線統一会議」、経済・医学部自治会の働きかけによって投票数は8000に達した⁽¹⁰⁾。

他方で、京大細胞の機関誌『京大戦線』5号(2月5日)には反植民地闘争デーに向けた演出が見て取れる。とくに、中国共産党との連携が強調され、北京放送による河上祭の紹介や、『人民日報』1月28日の論説「日本人民こそ犠牲 再軍備を黙示せず」が掲載された⁽¹¹⁾。同紙7号(2月19日発行)では、講和運動と反植民地闘争デーに向けた活動が紹介され、一面中央で「二・二反植民地斗争デー「アジア青年の集い」に参加しよう!」と呼びかけられた⁽¹²⁾。

こうして、京大内で両派の運動が重なりを見せるなか、運動上の対立が生じている。事の成り行きは京大細胞側が発した「声明」(1月30日付)に詳しい。このビラで、京大細胞は「日本共産党京大細胞統一委員会」という団体を以下のように批判する。

彼等は十月レッド・パージ粉碎大会で条件を無視してゼネストを主張し、水口委員長に「処分を恐れてストも出来ぬ日和見主義者」とヒボウした。而るに——ハデモ以来、学内に警官が侵入し「前進座と語る会」が弾圧され、大量処分があるや京大より姿を消し立命二部にたむろし「反戦学生同盟」を僭称して無署名挑発ビラを同志社その他に敷衍した。十二

月円山斗争により、六十七名の学生が獄中にあり、数百の学生が検察庁、裁判所へ抗議し釈放カンパに頑張つて居た時、彼等は椅子にすはつて研究会を開いていた。□に水口委員長が獄中にあり同学会が弱体化したのに乗じ「府学連自治会代表者会議」を召集し、人文学園と立命二部だけで第二府学連を作り京大をボイコットし彼等は、皆書記に名を連ねた⁽¹³⁾。

「彼等」として「阪本（E2）」らの名前があるが、昨年10月に京大細胞から除名された経済学部の阪本亮二と考えられる。阪本らは「反戦学生同盟」を名乗ったことから反主流派と考えられ、主流派・反主流派の対立が京大で再表面化した⁽¹⁴⁾。

こうした対立は全学連の耳にも届いていたようで、南敏雄「関西における反対派・分裂主義者グループとの闘争」（『学生評論』8号、1951年3月発行）では、昨年後半の国際派主導の学生運動を正当化しつつ、関西の大学、とりわけ京大の「分裂主義者」（主流派を指す）の「右翼的偏向」を批判している⁽¹⁵⁾。

2) 「民統派」議員の支援

1951年2月下旬は、日本共産党や学生運動にとって重要な出来事が起こった。世界平和評議会第1回総会でのベルリン・アピール採択（2月21日）と、党四全協での武装闘争路線の採用（2月23日）である。

学生運動にいち早く浸透したのは前者だった。3月1日に全学連中執はベルリン・アピール署名運動を開始した。一方で、全学連中執は主流派の平和擁護日本委員会を批判するなど、主流派・国際派の対立は平和運動にも及んでいる⁽¹⁶⁾。

両派の代理戦争は、3月27日の平和委員会全国代表者会議で頂点に達した。ベルリン・アピールを無視して全面講和投票運動に専念する主流派とベルリン・アピール署名運動を重視する国際派が対立したのである⁽¹⁷⁾。

主流派の強い京大では講和運動を継続しながら、4月の第2回統一地方選挙に向けて選挙運動に積極的に取り組んだ。しかし、ここにもベルリン・アピール署名運動が関係して、複雑な様相を呈している。

主流派系の『京大平和の戦士』7号（4月9日、京大同学会内で発行）を見れば、ベルリン・アピールへの言及はほとんどなく、講和運動と選挙運動が中心である。その方針は同誌一面下の「京大細胞統一選挙スローガン」に集約され、全面講和と支持、共産党非合法化反対などの「中心スローガン」と、学内細則粉碎、公安条例撤廃、全面講和の統一メーデーに立つ府市会議員支持などの「部分スローガン」から構成された。

前者には「五大国は平和条約を締結せよ！」としてベルリン・アピールを意識した文言もあるが、後者では「レッド・パージ反対の先頭に立つ出陣を学園に取返せ！／統一を乱す全学連中央の分裂主義者を追放せよ！」という反主流派批判が展開された⁽¹⁸⁾。これは選挙を控えて、反主流派の活動も活発化していたからであった。

実際、4月11日に「京都民主戦線共斗会議準備会」なる組織によって「全京都の愛国者諸君に訴う」と題するビラが撒かれている。一見民統派に見えるものの、提唱団体は金属京滋支部準備会、京都府学生自治会連合、京都反戦学生同盟、民主青年同盟京都支部準備会であるため、反主流派の労組、学生団体が結集したものと考えられる。

ここで、彼らはベルリン・アピールを採択した世界平和評議会の決議支持を繰り返し求めたうえで、「今度の地方選挙に亦共産党の一部の者は、これら人民の裏切者、戦争協力者と手を結び、この野党連合と称する売国連合を諸君等の味方の如くに宣伝し決定的に我々を敵に売り渡そうとしている」という主流派及び民主戦線批判を展開した⁽¹⁹⁾。

同じく、4月23日に先の「日本共産党京大細胞（統一委員会）」が「京大細胞（臨中）」および「同

学会内部の右翼分裂主義者」批判を目的としたビラを撒いた。同団体の認識では、『京大平和の戦士』は「京大細胞（臨中）」の発行物であった。ビラには「進歩的學生は関西地方反戦学同京大班（元京大反戦学同）に結集せよ！」と記されているので、党国際派—全学連中執—反戦学同—京大細胞（統一委員会）というラインが確認できる⁽²⁰⁾。

とはいえ、京大で多勢であったのは主流派で、全面講和要求と選挙支援が運動の主軸となる。彼らは、市会選挙と同じ日（4月23日）に『京大平和の戦士』9号を発行すると、「今日投ぜられる一票々々は日本の運命を決定する。“単独講和”の全国、学内えのその表れ“学内細則”の強行、まさにこれとの闘い」として、「市議民主戦線統一候補」への投票を呼びかけた⁽²¹⁾。

続いて、府県会議員選挙投票日（4月30日）には『京大平和の戦士』10号を発行し、市区町村選挙の総括と府県会議員選挙に出馬する民統派候補の支援を行った。先の市会選挙では末本徹夫（初代同学会委員長）が落選したため、「棄権はダレス・吉田の思ふ壺」として、学生たちに「府議民統候補」への投票を促した⁽²²⁾。

同学会は、この運動を翌日のメーデー（5月1日）に結びつけようとし、その前夜祭に記録映画「勝利の記録」を西部講堂で上映する計画を立てた。この映画は、昨年度に全京都民主戦線統一会議の依頼で日映演（監督小坂哲人）が作成したもので、大山郁夫、蜷川虎三、高山義三を先頭とする民主戦線の活動とメーデーの状況が活写されている⁽²³⁾。

5月1日、京大ではまず文学部からメーデー歌の合唱がはじまり、約80名が赤旗を先頭に学内デモを行った。その後合流した約800名の学生が「実質的なデモ」（会場である御所までのデモは公安委員会から禁止されていた）を行って京都御所で他団体と合流し、選挙に当選した民統派議員を先頭に市内を行進した⁽²⁴⁾。

Ⅱ 文化的民主戦線の予兆

1) 小野信爾救援運動

日本共産党内の一連の対立を見かねた世界平和評議会は、ベルリン・アピール支持・拡大運動に講和投票運動を含めることを助言した。これにより、4月中旬になって運動方針の歩み寄りが実現し、平和委員会常任委員会はベルリン・アピールが講和投票運動と一致した内容を持つことを確認、共産党臨時中央指導部もベルリン・アピール無視を『前衛』で自己批判した⁽²⁵⁾。

この影響は京大にも及び、『京大平和の戦士』11号（5月8日）の論調も大きく変化した。主張「統一メーデーの勝利とベルリン・アピール」にくわえ、「B・アピールこそ平和と独立の叫び」の記事や平和擁護日本委員会のベルリン・アピール署名運動が掲載された⁽²⁶⁾。

実践運動にも同様の変化が見られる。京大では小野信爾救援運動と春季文化祭実施という学内運動を通じて、ベルリン・アピールへの署名獲得を目指した点に特徴がある。

1951年2月、当時文学部東洋史学専攻新制3回生だった小野は、警察官に人民弾圧反対と民族独立への共闘を呼びかけたビラを下鴨警察署前で配ったことが地方公務員法違反に問われて検束された。のちに占領軍への妨害を禁止した政令325号違反に切り替わり、4月に大阪の軍事法廷で重労働3年、罰金1000ドルの判決を受けた。

小野は党の地域細胞に所属し、京大細胞や同学会に所属していなかった⁽²⁷⁾。それでも、『京大平和の戦士』5号（3月19日発行）に「面会もさせず小野君軍裁へ」の記事が載り、釈放後大阪軍裁に回されたことに対する批判や「労農救援会京大支部」を中心とする釈放嘆願署名運動の進展が記されている⁽²⁸⁾。同紙9号（4月23日発行）にも小野の獄中書簡が掲載されたほか、同学会を中心に減刑嘆願署名運動が展開され、4月下旬には「一千を突破」していたという⁽²⁹⁾。

しかし、逮捕を重く見た大学当局は、5月8日に服部峻治郎分校主事が小野の父兄を呼んで退学届の自発的な提出（復学の条件付き）を求めた⁽³⁰⁾。これに反発した学生側は服部、宮崎市定学部長、田代秀徳輔導部長、鳥養利三郎学長とそれぞれ面会后、退学勧告抗議署名を開始した⁽³¹⁾。

最も活発に運動を行ったのは文学部の学生だった。5月10日、文学部有志はピラや雑誌『ラッパ』3号（5月10日発行）でこの問題を訴え、その中で減刑嘆願署名が3500に達したこと、他学科や教員側からの協力を明らかにしている。さらに、同誌では「ベルリンアピール署名を強力におし進めねばならぬ。それによつてのみ小野君の叫んだ民族の独立も世界の平和も得られる」と述べて、両者の運動を結びつけた⁽³²⁾。

こうした運動の盛り上がり背景として、11日には史学科、分校学生、学友会を代表する10名が相談して「小野君救援会」を結成し、19日までに1070票と400円の救援カンパを集めた⁽³³⁾。

ミュレット京大講師の尽力もあって、5月26日の再審査で小野の量刑は重労働2年へ減刑された⁽³⁴⁾。以後も、小野救援運動は保釈嘆願と退学強要撤回の両面を掲げながら、より全学的に働きかけようとした⁽³⁵⁾。

さらに小野救援会代表は、6月7日に宮崎学部長同伴で鳥養学長と面会して、「一応退学して刑の終了後復学した方が小野君にとつて傷つかない」などの回答を得たが、学生側はこれを受け入れなかった⁽³⁶⁾。

大学側はあくまで強硬で、小野側に20日までに退学要請の回答を再び求めた。このため、小野救援会は強引な回答要請に抗議したうえで、ひとまず退学届提出期限を1週間のばしてもらった⁽³⁷⁾。

学生側は、25日に文学部学生大会を開催することを宮崎学部長側に認めさせ、退学勧告の撤回や保釈への努力などを要求する案を満場一致で可決

した。重要なのは、要求が認められない場合、「ストライキを以て処分を粉碎すべし」という案を賛成多数で可決したことである⁽³⁸⁾。

25日から翌日にかけて、学友会と小野救援会の代表は宮崎学部長、輔導委員と3度にわたって懇談した結果、26日午後に輔導委員から、学内処分はせず保釈にも努力するという学部長の意向を伝えられ、学生側が何度も要求してきた退学勧告の撤回を勝ち取っている⁽³⁹⁾。

2) 「民統派」と原爆展

この救援運動と同じ時期に始まったのが春季文化祭の準備であった。とくに文化祭の一環として行われた原爆展は学外にも影響を与え、のちの総合原爆展の布石となっていく。

もともと原爆展と連動した平和運動は、1951年1月に実施されていた。関西主婦連合会（全愛協に加盟）と婦人新聞社の共催、大阪府の後援で1月27日から翌月末まで千日前大劇地下の会場で丸木位里・赤松俊子の「原爆の図」展示会を行い、約42000人が詰めかけた。

4月に世界平和評議会書記局の助言で主流派・国際派の歩み寄りが見られたが、原爆展や映画祭の実施は国際派の平和委員会によって進められた。5月4日、平和委員会常任委員会は、平和の夏期講座、原爆展、原爆写真展、映画会開催などの事業とともに、ベルリン・アピール1000万署名獲得を目標に6月25日から8月15日までを平和月間としてキャンペーンを張った⁽⁴⁰⁾。

一方の学生運動では、依然として全学連中執・反中執の対立がくすぶっていた。特に関西ではその傾向が強く、5月23日に開催された大阪府学連大会では全学連中執派不信任が採択された。

翌日京大で開かれた同学会代議員会でも、全学連中執不信任が53対2の圧倒的多数で可決されている。理由は、全学連中執が昨年6月以来の関西とくに京大の学生運動を故意に批判し、統一地方

選挙と全面講和投票運動の強い推進を阻んだからとされた⁽⁴¹⁾。こうした傾向は同学会改選にも及び、「民統派」1890票、「文化運動」1132票、「反学同」113票として、「民統派」の圧倒的勝利に終わった⁽⁴²⁾。

このため京都では、主流派が掌握する同学会のもとで原爆展が準備されていく。その内容は「一、原子の解放年表 二、日本に投下された原爆の効果、三、原爆をめぐる世界の動き」の3部門から構成され、毎日30名の学生が資料集めに奔走した⁽⁴³⁾。

大学側の協力も得られ、田代秀徳輔導部長から関係機関に「京都大学学生文化祭開催についての御依頼」（5月8日付）が送られた。京大生が資料貸与に來た時の便宜依頼や原爆展開催の概要が以下のように記されている。

……近く開催する本年度春秋学生文化祭に当りましてはその一行事として原子力に関する講演会と展示会を民主主義科学者協会京大理学部班と京大社会医学研究会の主催及び京大同学会の後援の下に催す計画を致しております。本計画の目的が最近の原子力、原子爆弾に関する推移を純学術的立場より解明して学内外の科学的認識を昂めたいことにありますので本学関係教授を中心とした講演会と同時に一、原子力研究発展の年表とその説明、二、原子爆弾の原理、三、実験、ウイilson霧函、ガイガー、ミュラの計数管、四、日本に投下された原子爆弾についての理化学的、建築学的、医学的写真の陳列、五、原子爆弾をめぐる世界の動きの紹介等を内容とした展示会を五月十六日より約一週間開催致す次第であります⁽⁴⁴⁾。

民科京大理学部班主催とあるのは、理学部民科グループに所属していた中岡哲郎たちを指すと思われる。理学部では教員側も協力し、理学部物理学教室湯川研究室の井上健助教授から医学部教授の菊池武彦に宛てられた書簡でも以下の便宜依頼が綴られている。

来る五月の本学の文化祭の行事の一つとし

て「原子力に関する展覧会」を民主主義科学者協会及び社会医学研究会の共同主催にして開きたいと考えております。それにつきまして民主主義科学者協会の自然科学部の方で企画をしますと共に、学生部の人達が種々奔走されています。小生も物理学的な方面での相談を受けましたのですが、原子爆弾の人体に対する効果等も是非その際にとり上げたいとのこと。単に原子爆弾の威力について説くだけでなく、この種の催しといたしました〔ママ〕は或程度アカデミツクな立場からとり上げるべきだと存じます。又今回の企画にあつては、先年原爆の調査に際してなくなられた方々の追悼の意味も含ませたいと申しております。それにつきまして、種々の点で医学部の諸先生の御援助を是非お願いしたいと申しております。

御多用中、且突然の御願ひにて誠に恐縮に存じますが、係りの学生諸君が伺いました節は御引見の上、よろしく御援助、御斡旋の程お願い申し上げます⁽⁴⁵⁾。

「原爆の調査に際してなくなられた方々」とは1945年9月に広島の実験被害者災害調査のために京大から大野陸軍病院に派遣された真下俊一、杉山繁輝医学部両教授、研究員11名を指す。同月、台風による山津波で彼らを含む病院職員、被爆者約160名が亡くなった。最新の学術成果を伝えるだけでなく、彼らへの追悼も織り込まれた原爆展の実施となった。

春季文化祭「きけわだつみのこえに應える」の一環として原爆展が開催されたのは5月14日から20日までである。原爆講演会では、原爆の物理学的説明を木村毅一理学部教授、原爆症の病理学的説明を天野重安医学部助教授がそれぞれ行い、作家大田洋子の体験談もあって、会場の法経第四教室はほとんど満員だったという。

原爆展の会場では、医学部が所蔵する原爆症の

実物標本だけでなく、赤松俊子の「ピカドン絵巻」も掲げられた。5月14日のオープンから4日間で約4000人に達した入場者は、「深刻な面持」でそれらを見ていったという。展示とあわせて赤松と丸木位里の絵本『ピカドン』も販売され、「飛ぶような売行き」だったほか、ベルリン・アピールの署名も600ほど集められ、原爆世論調査も実施された⁽⁴⁶⁾。

春季文化祭の原爆展は、学生たちにとって、一定の手応えを感じる結果となった。『京大平和の戦士』13号（5月21日）では「原爆の使用を防止する為には国内外でこの様な原爆展を」という声が相当あつたことから見ても、如何に大きな感銘を与えたかが知られる⁽⁴⁷⁾とある。

この原爆展の準備を通して、理学部、看護学校、医学部で平和委員会の結成が進むという副次的な動きもあった。同号の記事「原爆展の中から平和委生る 理学部、看護学校などに」には、「Bアピール署名運動の中で平和ヨーゴ日本委は「十人□」の平和委員会を網の目の様に作る事を呼びかけ」とある⁽⁴⁸⁾。

例えば、医学部の平和委員会について、「主義主張を問わず、平和という言葉の下に集ったもので更に拡大する傾向にあり一人々々の努力で雪だるま式に広め様と意気込んで居り、基督者にも働きかけている。当面の活動はベルリンアピールをとることにむけ、又来る平和祭に丸物で行う原爆展に全員が協力し展示の原稿を書くなど、実質的に平和祭に参加することになり」との記述があり、原爆展の準備や平和運動を下から支える組織として広まっていったことが伺える⁽⁴⁹⁾。6月には、「全学いたるところに平和委員会を作るため」に、京大平和懇談会が結成された⁽⁵⁰⁾。

Ⅲ 「象牙の塔」からの脱却

1) 全京都青年学生祭

この成功体験を足がかりに、5月30日、京大同

学会、学部自治会、看護学校、同志社大、立命館大の代表約60名が京大に集まり、全京都青年学生祭準備懇談会を開催した。この場で、8月の第3回世界青年学生平和友好祭に連動した青年学生祭を6月下旬から7月上旬にかけて京都で実施し、とりわけ原爆展を中心に据えることを決定した。

計画案では、第1部は市内の百貨店を催場とする原爆展、第2部は京大での総合科学展、第3部は文化、スポーツ競技大会、第4部は円山公園での七夕祭（7月7日）を実施することになっている。なお、同学会が5月下旬から募集を始めた「京大反戦歌・詩」を6月初旬の学内投票を経て、第3部の会場で発表することも計画された⁽⁵¹⁾。

詳細な平和祭の「予定表」も残されており、「第1部 原爆展 7月7日～7月14日」の「内容」として以下の説明がある。

- (1) 原爆の原理——湯川博士を出した物理学の研究者、学生による展示解説
- (2) 原爆の凶——被爆経験画家赤松俊子の問題の三部作
- (3) 被爆当時の広島模型——広島原爆記念館にある模型の工学部学生による擬作展示
- (4) 原爆による被害
 - (イ) 建築物——爆心地から x km にある模型の建築物の被害は？ 工学部学生による展示
 - (ロ) 人体——その害毒が如何に無惨で執ようであることか？ 医学部学生の展示
 - (ハ) 農産物、森林——農産物、森林の被害は？ 遺伝因子に及ぼす影響は？ 農学部学生
- (5) 原子力の経済的、社会的研究——原子力の平和的利用は経済的 社会的に如何なる結果をもたらすか？ 経済学部、医学部 理学部——の研究

発表展示

- (6) 原爆と文学——原爆を主題とした文学作品紹介展示 被爆経験の手記集録、(文学部)
- (7) 原爆と国際管理——原爆の国際管理の経過、国際管理はどうあるべきか？(法学部)
- (8) 原爆と平和を守る運動——平和を守る人々は原爆をどう見、どうしようとしたか？国際語エスペラントで全世界に対し如何に訴えているか？ エスペラント研究会 吉田分校⁽⁵²⁾

このうち(6)は、文学部学友会内に「原爆体験記編纂委員会」が設けられ、その「趣意書」(6月7日付)で、平和祭の一環として体験記の募集が呼びかけられた⁽⁵³⁾。

同学会も翌日付で「趣意書」を発行し、先の原爆展が一般市民の「大きな共感」を呼び「全市民に公開せよとの多くの要望を受け」たため、「七月十四日から二十四日迄丸物百貨店四階催場で『総合原爆展』を行う」ことを明らかにしている⁽⁵⁴⁾。

しかし、大学当局は原爆展に滲む「政治色」を警戒し、企画展後援取り消しや医学部標本室の施錠を行うにいたる⁽⁵⁵⁾。この態度を同学会と京大細胞は「混乱と矛盾」と批判しながら、大学側の後援を求める署名活動を始め、15日から19日までに850の署名を集めた⁽⁵⁶⁾。

21日には、丸物側から同学会に会場貸与を拒否する非公式の連絡が入った。学生側は木村作治郎分校副主事に間に入ってもらうことを依頼、23日に丸物側と木村の会談後、同学会、木俣秋水市議、全官公の峠田も加わって交渉し、最後は「政治的に走らぬ」という条件で丸物から貸与承諾を得ることができた⁽⁵⁷⁾。

26日は、学内での開催を予定していた「総合科学展」について交渉中だった大学とも、以前の平和祭と切り離す、学外宣伝はしないなどの条件付

きで折り合い、「平和とよりよき生活のための総合科学展」との名称での開催が確定した。

学生によれば、大学当局側、とりわけ田代や角南正志学生課長の考える「政治的」とは、「京大はベルリンの指令で動いている」「青年祖国戦線のアピールに応えたところが政治的だ」というものだった⁽⁵⁸⁾。

実際、平和擁護日本委員会常任委員会が6月15日に開催され、6月25日から8月15日までを「反戦平和月間」としてベルリン・アピール署名獲得を呼びかける指示を出しており、ゆるやかに捉えるならば、学生運動もこの線に沿うものであったといえよう⁽⁵⁹⁾。

6月21日には、京大同学会から世界青年学生平和友好祭の推進母体である国際祭典委員会へ「原爆展を中心とした京大学生の平和祭の準備状況を綴った書簡」を送っており、この事業を「激励」する返事を受け取っている⁽⁶⁰⁾。

2) 総合原爆展

難交渉を乗り切りながら、学生たちは原爆展について京大協同組合の後援や都新聞社によるニュース・カーの宣伝を受けるなど着々と支援を取り付けていた⁽⁶¹⁾。

6月20日から22日まで、原爆展の巡回スチール展をまず立命館大学で開催し、下旬から7月上旬にかけて鐘紡、島津の工場や自由労組などを巡回して、本番開催前の地ならしを進めた。

春季文化祭で用いられた小「原爆展」の巡回も試みられ、京都工芸繊維大や京大宇治分校、京都学芸大、神戸大学姫路分校などで学生たちの目に触れた。「全京都に守られる原爆展」と学生たちが形容したのも頷ける⁽⁶²⁾。

『学園新聞』6月18日付の「学園評論」は「最近の学生の動きの中でこれほどの目新しい事柄はない」として、「これに従事している学生たちが、象牙の塔の中に立籠っている学問を、大衆のもの

にしようという意欲と、一方原子爆弾の最初の洗礼を受けた日本人が、いかに原爆に関心以上のものを示しているかということをしたゞしている」と記している。

その展示構想は『京大平和の戦士』17号（6月19日）に一端が⁽⁶³⁾、「総合原爆展の内容紹介」に詳細が記されている。後者によれば、展示順序は「一九四五年八月七日原爆第一号が投下された」、「赤松俊子丸木位里両画伯“原爆の凶”五部作」、「文学的表現（文学部）」、「グラフ（各学部）」として「人体＝原子病（医学部）」、「植物（農学部）」、「構造物（工学部）」、「天空の変化 理学部」、「原爆は如何にして作られたか（理学部）」、「パノラマ（工学部）」、「原子力を平和のために使うには」として「原爆国際管理（法学部）」、「平和的利用（理学部）（医学部）（経済学部）」、「平和的利用のための世界の動き（エスペラント）」であった⁽⁶⁴⁾。

原爆展には約200名を超える学生が制作に関わり、その数倍の学生が教員とともに協力した⁽⁶⁵⁾。学生たちは被爆地広島に行つて資料の貸与を受けたり、カンパを得たりしたほか、長崎の資料を求めて同志社大長崎県人会のメンバーが派遣された。学生の手によって、東大五月祭から原爆展の資料が京都にもたらされた⁽⁶⁶⁾。

6月27日には学生たちは各団体から持ち寄られた原稿を完成し、これを7月12日までにNAU（新日本建築家集団）が京都工芸繊維大生や美大生の協力を得て、ベニヤ板約190枚に書いていった。7月5日を完成予定として、西山卯三助教授ら建築学教室のメンバーが広島のパノラマを作成した。

京大内では6月末の吉田分校での吉田祭に引き続いて、7月1日から7日まで「平和とよりよき生活の為の総合科学展」が開催された。7月1日の運動会ではスプーン・レースやパン食い競走などが実施され、午後からは作家の野間宏を迎えて、京大反戦自由の歌の発表会が開催された⁽⁶⁷⁾。

総合原爆展は7月14日から丸物百貨店5階で開

催された。10日間で約3万人が来場したという。その反響は大きく、展示の感想には「見て涙が出て止りません。今こゝで再びあの時のことが思い出されて…（若い婦人）」「夜ねられへん（子供）」「私達が考えている地獄以上です。各地で原爆展を開いてほしい（老僧）」「戦争はどうにかして防がねば…。原子力を平和的に利用すれば私達の生活はどんなに素晴らしく幸福なものになるでしょう。（知合いのおばあさんを誘つて来た六〇の婆さん）」⁽⁶⁸⁾というものがあつた。

また、この原爆展にあわせて文学部で編纂されていた『原爆体験記』も7月14日に完成し、会場で売り出された⁽⁶⁹⁾。

原爆展の「純益」は、広島で原爆孤児を収容する孤児園が財政的に困窮しているため全額寄付されることとなり、これには左京税務署も展示入場料を全額税免除する稗なはからいを通知してきた⁽⁷⁰⁾。

もうひとつの目的であつた署名運動も目覚ましい効果を収め、ベルリン・アピール署名5389、講和投票2682のほか、平和カンパとして7035円がまたたく間に集まつた⁽⁷¹⁾。

京都で原爆展の影響は大きく、これを皮切りとして、京都の各労組は8月6日の平和大会を円山公園で予定していた。しかし、GHQの指示で中止となつたため、京大生と在日朝鮮人を先頭に「戦争の九月単独講和を粉碎せよ」などと叫びながら東山三条から新京極まで行進し、ここで民青团や自由労組と合流、約2000人参加のもと平和大会を開催した⁽⁷²⁾。

この約1週間後の8月14日から東京で全国平和擁護日本大会が非合法下に開催され、全国から代議員約250名が参加した。京都代表として出席した青木同学会委員長は原爆展の成果を報告したところ、同学会は「平和の戦士」として評議員の大山郁夫から表彰された⁽⁷³⁾。

Ⅳ 「自己批判」の先に

1) 二条約批准反対運動

原爆展が盛り上がりを見せるなか、京大同学会と全学連の関係は冷え込んだままであった。

大阪府学連、同学会では全学連中執不信任が決議されていたが、6月12日に開催された関西学連の大会に飛び火した。この場で全学連中執信任・不信任と今後の闘争方針が話し合われ、京大は大阪府学連とともに不信任賛成を表明したうえ、以下の活動報告を行った。

京大代表は、講和投票に関して二項目で七万票を獲得、この講和投票によって地方選挙に於ける統一派の議員の進出と自由党の凋落、京都平和問題協議会の結成、全京都平和祭の計画が進んでいることを報告、全学連中執の講和投票に「占領軍撤退」を入れ三項目で行うことの固執、地方選挙には占領軍撤退を云わない候補は推薦しないという方針は平和擁護闘争をセクト化するものであり、誤った方針であることが指摘された⁽⁷⁴⁾。

これに対し、兵庫県学連、立命館二部代表は中執信任を主張したが、中執不信任が採択された（賛成37、反対24、保留1）。

その全学連は第5回大会開催に向けて準備を進めていたが、「議案」の中で「学生戦線統一のために」を掲げている。「反対派の諸君の数々の誤った方針にもかかわらず主観的には、平和と独立の為に同じく誠実な活動を続けている反対派の多数の諸君と協同する余地はないであろうか」⁽⁷⁵⁾と問いかけ、一定の歩み寄りを提示した。

しかし、両派が集うはずの第5回大会は占領軍から禁止され、全学連中執も6月13日に大会中止を決定した。この中止をめぐって、京大を含む関西、九州、東北の各校代議員が全学連書記局に赴き、中執の態度を問い質している⁽⁷⁶⁾。

8月には共産党に大きな転機が訪れた。コミンフォルムは、機関誌『恒久平和と人民民主主義の

ために』8月12日付に四全協決議「「分派主義者に対する闘争に関する決議」について」を掲載して、事実上の主流派支持を打ち出した。

後ろ盾を得た主流派は、8月19日から21日まで第20回中央委員会を開き、四全協で採択された軍事方針を正当化する「日本共産党の当面の要求新しい綱領（草案）」を提出して、全党の討議に付すことを決定した（10月中旬の五全協で採択）。

この党内力学の変動は学生運動にも影響を与えたと考えられる。8月26日から全学連中央委員会総会が非公然で開かれた。この総会では「学生戦線の分裂に関する諸事項を真剣に討議した末、全員意見の一致に到達し、今後これを忠実に実践するならば、日本学生戦線の統一と団結が速かに達成されるであろうところの歴史的な「統一決議」を、従来反対派活動を行って来た諸君をも含めて満場一致感激的拍手の中で採択した」⁽⁷⁷⁾。

これにより、北海道学連、関西学連、京大同学会といった反中執派がこれまでの態度を「自己批判」した。京大同学会の「自己批判」は次のようなものであった。

…京大同学会は過去何年間か会費の納入をサボり、機関紙・資料の配布をボイコットして焼却又はプラカード下貼り用紙とし、且代金納入を拒否し、数度に及ぶ会議のボイコットによって全学連の規律に違反しつつ来てた。

同学会はこのことを自己批判する⁽⁷⁸⁾。

全学連中執内では依然として武井ら国際派の影響が根強く残っており、彼らの主導下で統一がはかられたことになる。京大同学会の形式的な「自己批判」の背景として、これ以前から党幹部の「自己批判」が続いていたことや党京都府委員会など上部機関の指示などが考えられるが、同学会内の意思決定過程も含めて、詳細は不明である⁽⁷⁹⁾。

この「統一」にあたり、全学連は総会で「闘争方針の確認」を7点行った。ひとつは「全面講和並に五大国平和協定の実現可能であることの展望

と確信を強めること」で、これは従来の路線の継承となる。とくに焦点となったのが、次のスト決議及び「反対派批判」である。

（2）闘争を第一期、第二期に分けて、それぞれストライキを含む強力な全国闘争を展開すること。即ち九月下旬と十月末から十一月上旬の二回に亘り、夫々調印に対する抗議並に批准国会に対する闘争を展開する。第一期は拠点大学における短期ストを含む全国的ゼネラルミーティング、第二期は全国的ゼネストをもってその闘争形態とする。ストの時機に関する決定は中執に一任する。

（3）再軍備と単独講和を粉碎する今後の闘争において、三日間に亘る討論で確認された従来の主として反対派の犯した誤り、即ち統一戦線の名による決定的瞬間における闘争の回避、サボ、日常闘争或は画一的指導反対を理由とする全国的政治闘争の妨害等の、主として経済主義的闘争指導の誤りを繰り返さないことの確認⁽⁸⁰⁾。

サンフランシスコ講和条約の調印と衆参両議院批准に反対するスト戦略への転換がここに確認されたことになる。以後、元「反対派」の京大学生運動にもこの闘争方針の影響が徐々に及んでいった。

2) スト決議の連鎖

サンフランシスコ講和会議は9月4日に開幕、8日には条約調印に至った。開幕前日には、共産党の合法指導部や国会議員が公職追放となり、全国300ヶ所にわたって党機関が搜索された。このため、全学連は9月下旬から傘下の団体に向けて、単独講和・再軍備に関する学生投票、10月ゼネスト方針、二条約国会批准阻止闘争をそれぞれ矢継ぎ早に指示している。

京大学生運動はこれまで通り、全面講和を訴え

たが、その活動はより学内へシフトしている。9月の学長選を前に同学会、自治会、京大細胞とも平沢興医学部教授の支援運動を始めたほか、日米「学生輔導厚生研究会」およびCIEの高等教育改善勧告の粉碎、接收中の楽友会館返還に向けた運動を起こした⁽⁸¹⁾。学内問題と連動するかたちで批准反対署名運動を展開していることが特徴である⁽⁸²⁾。

13日には、これまで同学会、京大職組、学部自治会、平和問題懇談会などが個々に活動していたことを反省し、教職員、学生代表ら約100名が集まって全学的な平和懇談会を設けた⁽⁸³⁾。

この統一的な両条約批准反対署名運動の狼煙となるのが、18日に予定される同学会主催全学平和大会であった。しかし、大学当局は「政治問題」やスト決議を警戒したため、学生との交渉は難航した⁽⁸⁴⁾。

こうしたなかで、学生たちはスト決議へ踏み切った。文学部では15日の教室代表者会議で「ストライキで批准粉碎に立上れ」の提案を決定、翌日の学生大会では告示9号返上や20日のストライキ決行を圧倒的多数の賛成で決議した。これを『京大平和の戦士』は「特報」として伝えている⁽⁸⁵⁾。

大学当局は、告示9号違反として16日付で文学部生3名に停学6か月の処分を下した。このため、学友会はすぐさま処分撤回要求署名運動を開始した⁽⁸⁶⁾。

こうした動きを後押しする全学連中執は17日に二条約反対に向けた第2次全国統一行動（10月25日）を呼びかけており、この指示内で「京大（文・経済）」は「スト参加は略々確実」と一定の期待が投影されている⁽⁸⁷⁾。

実際、経済学部では批准反対署名数が1000を突破していた⁽⁸⁸⁾。同学会でも文学部に倣えと、全学平和大会開催の準備を進め、反対する大学当局との交渉を明らかにしながら、ピラで大会参加を呼びかけた。

開催にこぎつけた18日の全学平和大会は、学生

800名参加のもとで講和問題が議論され、「単独講和及び日米駐兵協定批准反対」が決議された。尾形昭二と武谷三男が壇上に上がり、武谷は「原子力を戦争ではなく平和に利用せよ」と語った⁽⁸⁹⁾。

その翌19日には経済学部でも学生大会を開催し、二条約反対について20日の「実力行使」を圧倒的多数で可決した。このため、大会議長と同好会委員長が告示9号違反で停学6ヶ月の処分となった⁽⁹⁰⁾。

20日には労組を中心とする批准反対総決起大会が円山公園で予定されていた⁽⁹¹⁾。同学会も20日午前に「デモは許可になつた」のビラを撒き、京大西部講堂から東山三条までの地図を付して、デモと決起大会参加を促した。

デモで撒かれたと思われる京都大学同学会・全学平和大会・文学部学友会・経済学部同好会連名のビラは、「吾々のいのちと家族の生活を守りぬく唯一の手段は「実力をもつて断乎 両条約批准反対のストライキ・デモに立上る」以外にはない」と実力行使が不可避であることを伝えている⁽⁹²⁾。

20日の京大では文学部、経済学部が決議通りストに突入したほか、各学部から約450名が雨のなか「講和・安保条約批准反対」のデモ行進を京大構内から楽友会館、立命館、平安神宮まで実施した。途中、立命館大、同志社大の学生が合流し、デモ解散後はそのまま労組の大会に加わった⁽⁹³⁾。けれども、これらの反対運動は実ることなく、10月25日に両条約は衆議院で批准された。

V 「大衆」との距離

1) 秋季文化祭の交渉

同学会は翌月の秋季文化祭に向けて準備を始めていたが、開催時期をめぐる大学当局と対立した。大学当局側は11月1日の開始を主張し、同学会側は批准反対闘争で出遅れているため11月10日の開始と原爆展再公開を主張した⁽⁹⁴⁾。

10月25日から同学会と輔導部の交渉が始まるものの、大学側は27日に告示22号を発表して、

秋季文化祭の休日を11月1、2日と定め、交渉は決裂する。

京大細胞は、10月29日に「天皇を理由とする文化祭禁止反対」のビラを撒き、大学側の強硬な態度の理由を明らかにした。

全京大生諸君、この天皇は十二日にまる十二分だけ京大にくる。その為大学当局は同学会の計画している文化祭を「絶対に禁止する」と干渉を加えている。十五日からの原爆展再公開にさえつべこべ云つて来ている。更に大学は研究費にも出さない金を天皇歓迎費に使っているのだ。天皇来京を「天ちゃん来る」と一笑に付してはならない。これは日本国民を戦争にかりたてる大きな力でありこれと断乎として斗わねばならない⁽⁹⁵⁾。

同学会も、10月31日の執行委員会で、天皇来学を理由とする文化祭中止反対や警官の学内立ち入り禁止などを決議し、来学反対のビラを撒いている⁽⁹⁶⁾。

11月5日には、文学部学友会も委員会を開催して「天皇来学のため文化祭をつぶすことに反対し、之と断乎斗う」などの決議を採択した⁽⁹⁷⁾。

文学部平和懇談会の井ヶ田良治は、「天皇来学に当つての随想」を京大平和懇談会準備会実行委員会機関誌『平和のあゆみ』2号（11月6日発行）に掲載し、天皇はもはや道德の中心ではあつてはならないと論じた⁽⁹⁸⁾。

7日の国際青年デーにあわせて、京都でも青年大会を開催し、学生約1000人を含む約2500人が参加した。円山公園に向かう途中、学生のデモ隊が社会党代議士水谷長三郎の家の前でジグザグデモと投石を行ういわゆる水長宅投石事件が起こった。

この一件で、平岡定男（京交労青婦部長）、小畑哲雄（京大同学会執行委員）、松尾滋（立命館大生）が逮捕された（小畑は10日）⁽⁹⁹⁾。同学会は11日、執行委員を派遣して警察に抗議し、「ケ

イサツの意図する所は、天皇来学及び原爆展再開を前にし、幹部をタイホし、同学会の機能をマヒさせようとする計画的弾圧」だと批判した⁽¹⁰⁰⁾。

京大細胞機関誌『嵐について』22号（11月15日発行）に掲載された「T・K」の「水長〔水谷長三郎〕宅襲撃時事件について」では、「米日反動」の「暴力装置＝軍隊、警察その他」に対抗するために「武装」が必要とされ、「かゝる実力行使のみが吾々の戦線を強化し、敵にもつとも痛烈な打撃を与える」と推奨されている⁽¹⁰¹⁾。

来学が間近に迫り、同学会は11月9、10日と連続で服部学長宛の「申入書」を作成した。9日付では「われわれは、天皇の来学を特別に歓迎する意図はもっていないけれど、天皇の来学を拒否する意図も、もっていない」と記し、「大学内に於ける秩序の維持に対して、責任を負うのにやぶさかでない」として一定の協力的姿勢を滲ませた⁽¹⁰²⁾。10日付でも同趣旨だが、天皇神格化や自由制限への批判、来学に備えた建物補修批判が盛り込まれ、「公開質問状」を通じた天皇面談の要望が記されている⁽¹⁰³⁾。

「公開質問状」の執筆は、京大細胞メンバーの榎並公雄から理学部の中岡哲郎に依頼された。天皇を「一種の機械的人間であり、民衆支配のために自己の人間性を犠牲にした犠牲者」だとして、戦後も「神様天皇のデモクラシー版」「戦争イデオロギーの一つの支柱」が継続していると批判、そのうえで、戦争拒否や再軍備拒否の可否に関する5項目の質問を並べている⁽¹⁰⁴⁾。

2) 京大天皇事件

東京を発った天皇は、11日から京都府下を視察、翌12日に京大行幸を行った。午後1時前、正門付近には学内外から学生約2000人が集まっていたが、「毎日ニューズカー」が君が代を流し始めると、一部の学生が「平和を守れ」を歌い、学生たちは天皇が到着した大学本部玄関に殺到した。彼を迎

えた学生たちの様子と心情が次のように回想されている。

大多数の群衆は、天皇行幸を一目見ようとして時計台下に集った。その心情は単純ではない。「天皇帰一」思想の純粹さのうちに青少年時代の戦争を体験し、戦後「人間宣言」を聞いた幻滅と期待といったものがある。なぜ一目見ようとするか、誰も明確に語れる者はなかったであろう。斜に構えて皮肉な語り口で明快にしゃべる言葉は必ずしも真実ではない。戦後にデモクラシーを受け容れたとき、すっ飛ばしてしまった心情のうちの何ものかが、かれらを時計台下へ招き寄せたのであろう。それがかれらにとって今何を意味するかわからぬままに、その時刻、かれらは大学の隅々からそこへ走った⁽¹⁰⁵⁾。

車から降りた天皇はそのまま建物に入り、学生は沈静化したものの、約500名の警官が学内に侵入したことに刺激されて、歌は合唱へ発展する。歌詞の一番は「解放のため尊き命を偕〔と〕してはげしき心を燃やし 斗う友よ 世界の友よ ふきつる嵐について 赤ききづなを結びつつ 平和 平和 平和を守れ」というものであった⁽¹⁰⁶⁾。

彼らの合唱を耳にしながら御進講などを済ませた天皇は、午後3時再び玄関から車に乗って、まだ続く合唱を背にして京大から去っていった。

このいわゆる京大天皇事件は、時期が時期だけに、共産党武装闘争方針の影響が焦点となるが、天皇来学に対する京大細胞の方針は同学会と同じ意向だった⁽¹⁰⁷⁾。京大細胞もこの時期組織が十分に機能していたとはいえず、歌やプラカードによる活動を決めたものの、直前で中止が決まったり、指示が十分に行き届いていなかったりしていたという⁽¹⁰⁸⁾。

事件の翌日から、同学会と京大細胞は、ビラを撒いて文書戦を開始した。同学会の「大学当局は警官侵入の責をとれ」（13日）のビラでは、「平和

の歌」を歌ったその時の気持ちを「わだつみの声を残して死んで行つた先輩の声が我々の耳に残っている」ためと記している。

京大細胞の方はより急進的な態度を示し、ピラの後で「天皇制を廃止し民主共和国を樹立しよう」「天皇行幸を口実とした同学会の弾圧反対、小畑君を直ちに釈放し、武田君らに対する逮捕状を取りけせ」「原爆展を新徳館で開かせろ」などと書いた⁽¹⁰⁹⁾。

京大細胞はこの事件を振り返るなかで、「天皇制廃止という日本革命＝民族解放民主革命の突破口となる画期的な斗争」とこの事件を位置づけ、その賞賛を惜しんでいない⁽¹¹⁰⁾。

ただし、行幸における一大合唱に運動の「欠陥」が現れているとも述べ、「学生大衆が現在の天皇制をいかに考え、当面する天皇来学をどう迎えるかについて、詳細に、学生の感情にまで立ち至つて把握することができなかつた」こと、抵抗運動の場合に組織が重要であること、党新綱領の把握が不徹底であり、「合法性を拡大する方向で斗わねばならぬ」ことなどを挙げた⁽¹¹¹⁾。

この一件は、マスコミや国会で事件として取り上げられることで、学生たちへの非難が思わぬ形で巻き起こり、「市民」から同学会への批判的な投書が殺到した。それゆえ、同学会は市民に向けたピラで、「平和な人間としての天皇を迎えた」だけであり、混乱の責任は大学当局と警察にあると説いた⁽¹¹²⁾。

一方の大学側は12日から輔導会議を開いてきたが、14日に「十一月十二日京都大学行幸に際し生じた混乱について」を公表し、この事件が「単に偶発的なものではなく計画的なものであつたのではないかと察せられ、その目的は奉迎を混乱に陥らしめることによる示威にあつたのではないかと推測せられる」こと、「一部学生に常軌を逸した言動」があり、「この甚だしく良識を欠いた学生の言動が社会を刺激し、本学の名譽を損うに至つ

たことは極めて遺憾」とした⁽¹¹³⁾。

翌日、大学当局は告示13号を発表して同学会に解散命令を下したうえで、17日に事件とは関係のない学生を含む同学会幹部8名を告示17号違反で無期停学処分とした。同学会は、これをスケープゴートと批判したうえで、執行委員を中心に約100名で「大学を守る会」を設けて活動していくことになった⁽¹¹⁴⁾。

3) オール京大論と「自治」

この処分をめぐって、同学会側は大学当局を批判するが、19日頃から学生側の論調に変化が見られる。

同学会が19日付で作成したピラでは、この事件を「京大だけの問題ではなく、全日本人の切実な問題」として、「天皇と特審局の二刀流を使つて私達を圧殺しようとする勢力」に対する共同闘争を呼びかけている⁽¹¹⁵⁾。

京大細胞も機関誌『嵐について』23号(11月19日)の主張「学長、教授と共に大学を守ろう」では「服部を先頭に大学を防衛せよ」のスローガンのもと「広く深い国民戦線」の樹立を呼びかけた⁽¹¹⁶⁾。いずれも、大学外部にこそ真の敵が存在し、学内では服部峻治郎学長を先頭にまとまるべきという論であった。

同学会作成のピラ「われら誤ちを克服して勝利に向つて邁進せん」(20日付)で、敵の認識および学長に矛を向けた同学会の自己批判が行われている⁽¹¹⁷⁾。また、末川博から慎重な行動を求められた同学会は、大学側に事務所を引き渡すことで、「服部学長に今一度「学園の自治」のために闘う決意を固めさせよう」とした⁽¹¹⁸⁾。

21日には同学会執行委員会名義で「討論資料＝全日本の学生・教授・職員に訴える声明の同学会草案」を発表し、下記の「決意」を明らかにした。

(一) 私達は大学の自治を守ると云ふ一点で、全学生は勿論、教授、職員の全体が団結して、

服部学長を擁護して外部権力から大学を守る行動に立上る。

（二）大学の自治を真に実現するため、教授、職員、学生が共に大学機構について密接に意見を交換し、思想と世代の相異をこえて融合し、その機構を改革し、大学自治の完璧を期す。

（三）昭和十八年、軍閥の嵐の中でも羽田学長以下全学の力で守り抜いた全国唯一の組織シキである同学会の解散を全学の力で取消させ、あくまで外部権力から守りぬき、又不当に処分された八名の同学会幹部学生を全学の力で大学に復帰させる⁽¹¹⁹⁾。

同学会はこの翌日にも新たな草案「われ等天皇制の強化に反対する（草案）」を発表し、先の「外部権力」の一端と向き合う姿勢を示している。これは「天皇制」もさることながら、「市民」のなかにある「封建制」と向き合うべきという考えに基づいていた。

天皇を偶像視する国民感情がわれわれの想像もしなかつたところにまで残っており、帝国主義者はこれを拡大し□□しようとしてゐることが明らかとなつた。このおくれた思想と闘うことが、平和を愛するわれわれにとつての最大の任務であり、これを粉碎することが日本を植民地にしわれわれ青年を肉弾にしようとする侵略主義者の野望を根底から覆へすことである。今度の事件を契機として天皇の問題は全国民の問題となつている⁽¹²⁰⁾。

26日に同学会は『平和を希うがゆえに 京大天皇事件の真相』を刊行して、この問題を詳しく取り上げた（12月8日に増補版刊行）。

同じ日に、同学会はこれまでの「草案」を折衷する趣旨の「京大生の訴え（草案）」を執筆し、より具体的な敵（「学内に於ては、外部権力と連絡を保ち、大学の自治を売らんとする内藤〔敏夫〕庶務課長の如き人物であり、学外に於ては、天皇

制の上に立つた特審局政治の強化に奔走する大橋〔武夫〕法務総裁〔、〕斎藤〔昇〕国警長官、永田〔圭一〕市警本部長の如き人物」）を明示しながら、学長を先頭に彼らと取り組むべきことを訴えた⁽¹²¹⁾。

この事件に関して事態を重く見た政府・自由党は、26日の衆議院法務委員会に服部学長と青木宏同学会委員長を喚問した。同学会は、青木の報告要旨をビラにまとめたうえで、二人の喚問の様子を「大学の自治が「犯罪」と政治的にからみ合わされて一挙にほうむり去られようとしているのを目のあたりに見た」とまとめている⁽¹²²⁾。彼らが目の敵とした検察側はこの事件を公安条例違反にもっていきたい考えだったが、証拠不十分で失敗に終わった。

おわりに

本稿は、1951年の京大学生運動の軌跡を総合原爆展と京大天皇事件に焦点を当てながら論じたものである。以下、行論をまとめた。

1950年後半の度重なる諸事件を受けて京大同学会内で国際派の影響が減退し、1月の選挙では「民統派」の新執行部が選出された（「I 政治的民主戦線の再興」）。それゆえ、同学会、京大細胞とも共産党臨時中央指導部や全愛協と共振する形で全面講和投票運動を積極的に推進した。しかし、学内が完全に主流派で統一されていたわけではなく、反主流派に立つ「日本共産党京大細胞統一委員会」が活動し、全学連中執側も主流派の動きを「右翼的偏向」と批判するなど、党内対立は依然として学生運動にも影響を与えていた。このため、党国際派や全学連が推進したベルリン・アピール（1951年2月）の署名運動は同学会、京大細胞とも当初は積極的とはいえず、全面講和運動を継続しながら4月の統一地方選挙における民主戦線統一候補の支援に奔走し、この盛り上がりをもとに（5月1日）へ結実させ、前年以来の政治的民主戦線の再興を試みている。京大学生運動で全面講

和運動とともにベルリン・アピール署名運動が重要な主軸となるのは5月頃になってからであった。

新学期以降は学内運動の方が盛んで、その主軸となるのが小野信爾救援運動と春季文化祭である（「Ⅱ 文化的民主戦線の予兆」）。文学部生の小野は党地域細胞に所属していたが、2月に警察署前のビラ配りが地方公務員法違反（のち政令325号違反に切り替え）に問われて逮捕された。3月以降から文学部生を中心に小野の救援活動が湧き上がる。のちに大学当局から小野側に退学届提出を求められるものの、学生たちは小野の減刑要求とあわせて退学要求撤廃を求めて運動し、最終的に、学内処分をせずという大学側の妥協を勝ち取った。

5月開催の春季文化祭「きけわだつみのこえに應える」で準備された原爆展は4月の政治的民主戦線を文化面で拡大させる大きな契機となる。展示の準備は民科京大理学部班等に所属する理学部生や医学部生を中心に行われたが、教職員の協力も認めることができる。原爆展は、原爆に対する科学的認識を高めるという名目で、学内外の原爆関連資料の展示や理・医教官による原爆の講演を実施し、一般の参加者も来るほど手応えを感じる結果となった。学生たちは小野救援運動の時と同じく、原爆展をベルリン・アピール署名運動に結びつけることを試みている。

この助走を経て、京大生たちは8月の第3回世界青年学生平和友好祭に呼応する全京都青年学生祭を開催し、その一環として総合原爆展、総合科学展、競技大会の実施を決めた（「Ⅲ 「象牙の塔」からの脱却」）。原爆展の会場を提供することになっていた丸物や大学当局は、「政治色」を警戒し、後援をめぐって学生側と紛糾したが、これは交渉のなかで解決にいたる。大学以外には労組や新聞社の支援があったほか、本番を前に原爆のスチール展や小原爆展を実施することで、確実に支持を広げていった。本番の準備も学内外の学生数百人が関わり、教員も協力し、広島・長崎・東京まで

遠出して資料の貸与を受けた。7月14日から10日間にわたって丸物百貨店で開催された総合原爆展には約3万人が来場するかつてない反響となった。この時も学生は企画展を通してベルリン・アピール署名、講和投票を実施して多くの賛同を得たが、ここには「象牙の塔の中に立籠っている学問を大衆のものにしようという意欲」が込められていた。

この間も全学連中執と反中執派の対立は続いていたが、8月にコミンフォルムが主流派支持を打ち出すことで勢力図が変動する（「Ⅳ 「自己批判」の先に」）。この余波は学生運動にも及び、これまで京大同学会を含む全学連反中執派は「自己批判」を遂げて、ひとまず学生運動の戦線統一を実現してストを含む新聞争方針を決定した。9月にはサンフランシスコ平和条約が調印され、学生たちの運動も国会での批准反対運動に集中した。京大では学長選挙の支援、楽友会館返還運動など学内の運動と絡めて批准反対の全学平和大会を計画するが、その折衝で大学当局と紛糾し、文学部ではストを決議した結果、学生処分へ発展した。経済学部も二条約批准反対に関して「実力行使」を可決するなど、前年後半以来の運動の急進化を認めることができる。

京大内では、同学会を中心に11月の秋季文化祭の準備に取りかかるが、その開催時期をめぐって大学当局と対立した（「Ⅴ 「大衆」との距離」）。京大細胞は当局側の強硬な態度の背景として天皇来学を暴露した。同学会はこの来学を批判しつつも、来学を迎えもせず拒否もしない態度を取って、神格化や奉迎予算執行への批判を綴った「公開質問状」を発行した。

以後、大学当局と学生側は平行線を辿ったまま、天皇来学の日（11月12日）を迎えた。当日はニュース・カーが流した「君が代」に対抗して学生たちは「平和の歌」で来学した天皇を迎えた。予め計画された行動を実行に移したというよりは、合唱

も含めその場の展開に身を委ねた学生たちが多かったと思われる。いうならば、主流派の武装闘争方針と国際派のスト戦略の影響を背景として、総合原爆展から二条約批准反対運動へと運動が再急進化を遂げるなかで、警官の学内侵入とそれを許した大学当局に対する学生側の反感がこの事件の底流にあったと考えることができよう。

しかし、この一件によって同学会は解散、幹部8名が無期停学を命ぜられたほか、議会や新聞で事件が取り上げられて、学生たちは「市民」から多くのバッシングと批判を受けた。学生側は当初は大学当局批判を繰り広げるものの、矢面に立つ学長を学生が支援するというオール京大論に訴えて、批判の対象はマス・メディアや検察、天皇など学外勢力へと移っていった。

〔註〕

- (1) 拙稿「1950年前後における京大学生運動（上）」『京都大学大学文書館研究紀要』2015年3月号。
- (2) 「川合一良氏・葉子氏「同学会・原爆展・女子学生懇親会等について」」『京都大学大学文書館研究紀要』2007年1月号。小畑哲雄「平和を追い求めた青春「総合原爆展」と「京大天皇事件」」『大原社会問題研究所雑誌』2013年3月号。同『占領下の「原爆展」平和を追い求めた青春』、1995年6月、かもがわ出版。同編『「京大天皇事件」を語る会記録集』2002年3月、小畑哲雄。佐藤文隆「科学者の散歩道（第21回）京大同学会「総合原爆展」人はおばけになる」『現代思想』2015年8月号。河西秀哉「敗戦後における学生運動と京大天皇事件「自治」と「理性」というキーワードから」『京都大学大学文書館研究紀要』2007年1月号。今西一「京大天皇事件前後 小畑哲雄氏に聞く」『小樽商科大学人文研究』2010年11月号。同「「京大天皇事件」から技術史家へ 中岡哲郎氏に聞く」『アリーナ』2011年4月号。宇野田尚哉「朝鮮戦争下の京大学生運動と『京大反戦平和詩集』」『京都大学大学文書館だより』2014年10月号。益田肇「京

都大学同学会」テッサ・モーリス・スズキ編『ひとびとの精神史』2巻、2015年8月、岩波書店。

- (3) 「八 全面講和運動と日本再武装反対運動について」『特審月報』2巻3号、1951年3月、法務府特別審査局。以下、同時期の平和運動は森下徹「全面講和運動の歴史的位 置 全面講和愛国運動協議会の組織・論理・運動」（『歴史研究』1995年3月号）を参照した。
- (4) 住谷悦治・高桑末秀・小倉襄二『京都地方学生運動史』276頁、1953年2月、京都府労働経済研究所。「民族の危機を救え 京大同学会 講和投票展開を決議」『京大平和の戦士』2号、1951年1月30日、京大平和の戦士社、『戦後学生運動関係資料Ⅰ』249-2、京都大学大学文書館所蔵。以下、『戦後学生運動関係資料Ⅰ』は『戦後』、『京大平和の戦士』は『戦士』、京都大学大学文書館は京大文書館と略記する。『京大平和の戦士』発行所は同一のため以下省略する。
- (5) 京大平和の戦士社「創刊に当つて」『戦士』1号、1951年1月16日、『戦後』249-1。同紙創刊号には京大細胞機関誌『京大戦線』の宣伝や同学会、各学部・分校自治会、京大職組連名のメッセージと活動状況が掲載された。同誌5号には「京大同学会内京大平和の戦士社」とあるため、同学会内に置かれつつも京大細胞の影響を強く受けていたことが考えられる。新聞紙として体裁が整っている理由は、京都大学新聞社で編集に従事していた稲田壽夫が「発行責任者」だったこと、京大生が通う店舗の広告料など一定の発行資金が準備されていたためだろう。
- (6) 「講和投票は民族存亡の鍵」『戦士』2号。
- (7) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編3、822頁、2001年3月、京都大学教育研究振興財団。ただし、こうした運動手法は、のちに全学連から「京大で見られる如く数のみを問題とし、神社の祭日に夜店と並んで、香具師同然の口上で、意義も理解させずに署名を取るのは明白な誤り」と批判されている（前掲『資料 戦後学生運動』2、298、9頁）。
- (8) 三一書房編集部編『資料 戦後学生運動』2、

- 268頁、1969年2月、三一書房。
- (9) 同前、285頁。
- (10) 「全学で講和投票既に八〇〇〇 反戦の願いをかけて」『京大戦線』5号、1951年2月5日、日本共産党京大細胞『戦後』248-6。
- (11) 中国側も、17日に中華人民共和国湖北人民革命大学第二部会名義で、帝国主義者と戦う全学連に対する「無限的同情和支持」を記したメッセージを送っている（「全学連大会へのメッセージ」『戦後』126-4）。
- (12) 『京大戦線』7号、1951年2月19日、日本共産党京大細胞、『戦後』229-1。同学会の方も「アジアの問題はアジア人の手で！」と書かれた「“アジア青年の集い”に参加しよう」（2月21日付）のビラを撒いた。Stanford University Hoover Institution Archives/the East Asia Collection/the Japanese Modern History Manuscript Collection/Post-World War II communist movement/Box 83。以下、JMHMCと略記。講師として、日仏会館のオーシュ・コルヌ、文学部教員里井彦七郎や朝鮮、中国、インドネシア、ベトナム、インドら「各アジア民族青年代表」が記されている。
- (13) JMHMC/Box 83。□は判読不可を指す（以下同）。
- (14) 『京大戦線』5号の主張「講和投票を分裂させるな」でも、「新しい形の妨害」が現れているとして「過日京大細胞統一委員会との署名入りのビラを流している一派」の存在に言及した。このビラを確認できていないが、主張では「全占領軍の撤退」を投票内容に入れることを提案していたことから、やはり反主流派系統という（『戦後』248-6）。
- (15) 前掲『資料 戦後学生運動』2、251、263頁。これに対して、「何よりも数百の活動的學生を結集して関西反戦学同が結成され、その組織は反対派の妨害にも拘らず確実に発展し京大、大阪市大の中にも深く根をおろしつつある」という記述は、阪本らの活動を支援するものであったと考えられる。
- (16) 2月2日の同委員会総会で平野義太郎常任委員、議長鈴木東民、産別の吉田資治らと全学連が対立したことが発端であった（同前、294頁）。
- (17) 前掲「全面講和運動の歴史的位罫」。同会議でア

- ピール採択をめぐって紛糾すると、主流派系の30名は退席し、残りの20名でベルリン・アピールと統一を守るアピールを採択した。退席した30名は、翌日全愛協第2回全国代表者会議を開催して、講和投票運動への邁進を確認後、彼らだけで先の全国代表者会議を代理として仕切り直す行為に打って出た。
- (18) JMHMC/Box 83。
- (19) JMHMC/Box 83。
- (20) 日本共産党京大細胞（統一委員会）「出陣候補を支持せよ!!」『戦後』309-1。
- (21) JMHMC/Box 83。左京区は末本徹夫（無）、初代同学会委員長）、安井信雄（共）、井上慶之助（労）、上京区は坪野米男（無）、浅井茂（無）、木俣秋水（無）、平田敏夫（共）、中京区は前川菊之助（共）、小西恭次郎（無）、平野勇次郎（社）、下京区は津司市太郎（共）、梅林信一（無）、浅川憲次（労）、右京は刀根末二郎（社）、渡辺伊之助（無）、八住五郎（共）、東山は小柳津恒（共）、竹村ミノル（無）、伏見は井上武夫（共）、古卿寅英（無）、細川政之輔（社）である。
- (22) JMHMC/Box 83。左京は塩見松治（無）、上京は灘井五郎（共）、宇野清（社）、山崎嘉三郎（労）、中内広（共）、下京は久保田文雄（労）、浅川亨（共）、右京は泉隆（共）、東山は富松清（無）、伏見はハリマ光雄（共）である。
- (23) 「京大でも“勝利の記録”上映」『戦士』10号、1951年4月30日（JMHMC/Box 83）。
- (24) 「戦争屋を叩き潰す統一メーデー挙行さる 学内デモで八十名参加」『ラッパ』2号、1951年5月4日、ラッパ社、『戦後』228-1。
- (25) 前掲「全面講和運動の歴史的位罫」。
- (26) 「B・アピールこそ平和と独立の叫び」『戦士』11号、1951年5月8日、『戦後』249-3。
- (27) 前掲「敗戦後における学生運動と京大天皇事件」参照。
- (28) 「面会もさせず小野君軍裁へ」『戦士』5号、1951年3月19日、京大文書館所蔵。
- (29) JMHMC/Box 83。「小野君に重労働三年 減刑嘆願署名運動すゝむ」『学園新聞』1951年4月30日付。

- 以下、『学園』と略記。小野は書簡のなかで、「以前は〔刑が〕一年程度に評価された同一の事象が、今では三・四・五年と評価されていると云う事は、それだけ私達一人々々の行動の価値が増大して来た」と述べて、判決に一矢報いた。
- (30) 「小野軍裁問題 自発退学を要請」『学園』1951年5月21日付。
- (31) 「史学科で「小野君救援会」生る」『戦士』12号、1951年5月14日（JMHMC/Box 83）。
- (32) 「退学要求された小野君を守ろう」『戦後』378-1。「史学科、小野君の退学強要反対へ動く」「主張 小野君のこととベルリンアピール」『ラッパ』3号、1951年5月10日、文学部内ラッパ社、『戦後』5-1。
- (33) 前掲「史学科で「小野君救援会」生る」。「小野救援会大活躍」『ラッパ』4号、1951年5月24日、文学部ラッパ社、『戦後』246-1。
- (34) 「小野軍裁問題 重労二年に減刑」『学園』1951年6月4日付。
- (35) 「大学の小野君保釈への協力を！」『戦士』16号、1951年6月11日、『戦後』249-6。「小野松岡の退学反対委員会」『ステトコ』6号、1951年6月11日、京大医学部ステトコ同人。
- (36) 「小野問題で学長消耗、田代孤立」『ラッパ』6号、1951年6月7日、文学部ラッパ社、『戦後』244-1。
- (37) 文学部学友会「学生大会を持とう」『戦後』101-1。「廿日までに退学届」『学園』1951年7月1日付。
- (38) 学友会「ストを含む実力で退学勧告を粉碎せむ！」『戦後』287-1。
- (39) 学友会委員会「小野君の退学勧告、遂に撤回さす」（JMHMC/Box 83）。「学部長退学勧告を撤回」『学園』1951年7月5日付。「平和の戦士、小野君を守れ」『戦士』19号、1951年7月2日（JMHMC/Box 83）。
- (40) 前掲「全面講和運動の歴史的位置」。
- (41) 「全学連中執委を不信任か」『学園』1951年6月4日付。このため、反主流派に立つ関西地方反戦学同京大支部や「日本共産党京大細胞（統一委員会）」がピラを撒き、反攻に出ている（日本共産党京大細胞（統一委員会）「平和と学生戦線統一のために 同学会代議員選挙を闘いとれ！」（JMHMC/Box 83）。関西地方反戦学同京大支部「全学連中央不信 認否決！ A自治委員会にて」『初期全学連資料』58-5）。
- (42) 「民統派圧倒的に勝利」『戦士』17号、1951年6月19日、『戦後』249-7。ここには反戦学生同盟、「京大細胞統一委員会などの名の下に、同学会各自治会を中傷し、活動を妨害してきた極左分子（昨年京大細胞から除名されたものが中核）が徹底的に敗北を蒙ったことである。特に経済学部では阪本、坂東、青木（弘）田中、松尾という分裂主義者が常に自治会を誹謗し乍ら」などの批判が加えられているほか、同学会委員長青木宏が京大細胞の推薦を受けていたことが記されている。さらに代議員選挙も行われ、定員178のうち「民統」107、「運動部ESS」40、「中間派」5、「反学同」6という結果となった（「注目の代議員選挙終る」『学園』1951年7月1日付）。
- (43) 「理、医共同で原爆展 文化祭プログラムより」『戦士』11号、1951年5月8日、『戦後』220-1。
- (44) 田代秀徳「京都大学学生文化祭開催についての御依頼」。
- (45) 「菊池先生宛井上健書簡」。作成年月日は不明だが、内容から春季文化祭前と判断した。
- (46) 「原爆展 “平和の為の原爆” 許せぬ」『戦士』13号、1951年5月21日、『戦後』218-1。「修学旅行の女学生も 評判集めた京大原爆展」『学園』1951年5月28日付。
- (47) 「主張 原爆展とコリンズ声明」『戦士』13号。
- (48) 「原爆展の中から平和委生る 理学部、看護学校などに」『戦士』13号。「B・アピール二千へ」『学園』1951年6月4日付。
- (49) 「Ⅲ回生 平和委員会生る」『ステトコ』6号。
- (50) 「全学いたるところに平和委を！ 京大平和懇談会生まる」『平和の事業』1951年6月26日、京大平和懇談会、『戦後』234-1。
- (51) 「繰りひろぐ京都青年学生祭」『学園』1951年6月4日付。「京大反戦歌・詩を募集」『学園』1951

- 年5月28日付。
- (52) 「京都青年学生平和祭 予定表」。ただし、第2部までしか掲載されていない。これは後述の京都大学同学会「趣意書」（6月8日付）の資料として配布されたと考えられる。同内容が『平和新聞』6号（1951年6月20日、平和新聞社、京大文書館所蔵）に掲載。「原爆展と国際管理」の担当は法学部の民科グループであったと考えられる（「進む平和祭プラン」『法学部学生自治会 自治会ニュース』1号、1951年6月8日、法学部学生自治会〔JMHC/Box 83〕）。
- (53) 原爆体験記編纂委員会「趣意書」。豊田善次の回想によれば、「そのころ高橋（和巳）と親しかった宮川裕行が中心になって被爆者の手記を集め、『原爆体験記』を刊行した」とある（同『高橋和巳の回想』75頁、1980年12月、構想社）。
- (54) 京都大学同学会「趣意書」。正しくは5階である。賛助団体として京都平和に生きる会、宗教人懇談会、京都教職員組合、同志社大学平和に生きる会、同志社大学長崎県人会、同志社大学広島県人会が記されている。
- (55) 「「標本類は一切貸さぬ」田代書簡」『戦士』17号。「標本室に閉錠 悪質妨害者は誰か？ 原爆展ニュース」『ステトコ』号外、1951年6月21日。
- (56) 京都大学同学会「何故大学は原爆展を後援しない」『戦後』310-1。前掲『資料 戦後学生運動』2、354～6頁。京大細胞「平和のために原爆展を守れ!!」（JMHC/Box 83）。「原爆展守れ」の全学署名起る」『戦士』17号。
- (57) 京大同学会「丸物、原爆展会場拒否に動く」（JMHC/Box 83）。「会場、丸物に確定」『戦士』18号、1951年6月25日（JMHC/Box 83）。京大同学会「原爆展丸物決定！科学展大学承認に向う！」『戦後』333-1。「準備進む総合原爆展」『学園』1951年7月5日付。
- (58) 「総合科学展干涉の三条件再考さす」『戦士』18号。総合科学展については京大同学会「平和とよりよき生活の為の総合科学展」（『初期全学連資料』49-32）も参照。
- (59) 「一千万のB・アピール署名を」『戦士』19号。
- (60) 「“諸君の代表をベルリンへ” 国際祭典委より同学会へメッセージ」『戦士』20・21号、1951年7月19日（JMHC/Box 83）。
- (61) 「原爆展 『原爆図』五部作を出品」『学園』1951年6月11日付。
- (62) 京都大学同学会原爆展製作者一同「全京都に守られる原爆展」（JMHC/Box 83）。「是非私の所でも…」と各地に起る原爆展の反響」『戦士』18号。「原爆展是非観に行きたい」深い感銘よぶスチル展」『戦士』19号。前掲「準備進む総合原爆展」。
- (63) 「総合原爆展の構想」『戦士』17号。
- (64) 「総合原爆展の内容紹介」。
- (65) 「学園評論 原爆展の意義と協力について」『学園』1951年6月18日付。
- (66) 「各地より資料集る」『学園』1951年6月18日付。
- (67) 「天を焼く平和の聖火」『学園』1951年7月9日付。「京大反戦自由の学生歌」楽譜が『戦士』20・21号に掲載。
- (68) 「まるで地獄じや…」『戦士』20・21号。
- (69) 「原爆体験記できあがる」『戦士』20・21号。これに呼応する形で『学園新聞』8月1日付でも「平和は求めて追うべし」総合原爆展特集」が組まれている（「平和は求めて追うべし」総合原爆展特集」『学園』1951年8月1日付）。
- (70) 「純益孤児園に寄付」『学園』1951年7月9日付。
- (71) 「“俺たちもやるぞ” と斗いの先頭きる青年労働者」『戦士』22・23号、1951年8月6日、『戦後』249-8。
- (72) 「三〇〇〇の武装警官尻目に実力でかちとった八・六平和大会」『戦士』22・23号。
- (73) 「平和擁護日本大会ひらく」『戦士』24・25号、1951年8月30日（JMHC/Box 71/Fldr 2-1）。「同学会晴れて表彰」『戦士』28号、1951年9月12日、『戦後』249-10。この場で平和署名数が518万、講和投票数が464万に達したことが報告されている。
- (74) 前掲『資料 戦後学生運動』2、338頁。
- (75) 同前、352頁。
- (76) 「戦意を失う全学連中執の分派」『嵐について』8号、1951年6月20日、京大文書館所蔵。京大側は「中執の斗争方針が誤っており、学連組織を縮

- 小させ、セクト化して居る」などと問い質した。その後、中執と距離をとる全学連代議員は、17日に東京外大で全国学生統一会議を開催、この場で全学連中執派を非難し、独自の活動を推進していくことを決めた。こうした動向に対して、全学連中執側から「全学連第五回全国大会の禁止に抗議し弾圧に乗ずる分裂策動を糾弾する」という批判声明が出されている。この声明の署名者には「京都大学代議員有志」が含まれ、京大は反中執派に属しながらも、全国学生統一会議には加担していなかったと考えられる（関西では大阪商大が参加）。
- (77) 前掲『資料 戦後学生運動』2、361、2頁。
- (78) 同前、366頁。
- (79) この背景について今西一氏から貴重なご教示を得た。
- (80) 前掲『資料 戦後学生運動』2、367、8頁。
- (81) 「“平沢教授を”の声全学に漲る」『戦士』28号。同学会「学園を破壊する日米輔導研究会反対！」（JMHC/Box 71/Fldr 2-1）。
- (82) 「ぐんぐん広がる返還署名」『戦士』32号、1951年10月1日、『戦後』249-13。10月4日から、経済学部同好会は学内で批准反対署名をスタートさせた（「批准反対署名始る 試験中のE自治会で」『戦士』33号、『戦後』249-14）。
- (83) 「十三日、全学平和活動者会議」『戦士』33号。「文、経、が実力行使へ」『学園』1951年10月22日付。
- (84) 同学会中央執行委員会「講和批准を前にして全学に訴える！」『戦後』142-4。日本共産党京大細胞「「政治問題は討議するな」と大学当局」『戦後』142-1。
- (85) 「文学部、批准反対スト決議」『戦士』34・35・36号、1951年10月16日、『戦後』249-15。文学部学友会「文学部学生大会20日スト決議—告示九号、批准粉碎楽友会館返還決議—」『戦後』155-5。
- (86) 文学部学友会「批准反対に立ち上つたL学生の処分を許すな」『戦後』155-8。
- (87) 前掲『資料 戦後学生運動』2、386頁。
- (88) 「批准反対署名一千突破」『戦士』34・35・36号。
- (89) 全学平和大会「全学平和大会は訴える 20日批准反対総ケツキのデモえ！」『京大天皇事件関係資

- 料』2-4、京大文書館所蔵。以下、『京大天皇』と略記。「八百の平和大会開く」『学園』1951年10月22日付。
- (90) 前掲「文、経、が実力行使へ」。「更に二学生処分さる」『学園』1951年10月29日付。
- (91) 「批准反対総蹶起大会」『戦士』34・35・36号。
- (92) 「実力を以て両条約粉碎に立上ろう 全京都の労働者の皆さん!!」『京大天皇』2-6。
- (93) 「雨について批准反対デモ」『学園』1951年10月29日付。
- (94) 「原爆展を再公開」『学園』1951年10月29日付。この前後の同学会では代議員会の成立が困難になっていたこと、10月16日の五全協で掲げられた武装闘争方針を受けて、学内から「活動家」の学生が消え始めていたことも準備遅延の一因かもしれない（前掲「平和を追求めた青春」）。
- (95) JMHC/Box 71/Fldr 2-1。ピラでは、大山郁夫を迎えて11月7日に開催予定の集会が天皇来京のため当局から妨害されているとも記しており、学外から情報を入手した可能性もある。京大細胞は7日にも「天皇来学から文化祭を守れ」のピラを撒いて、私服警官の侵入や大学当局の頑なな態度が「天皇行幸の仕業」だとした（日本共産党京大細胞「天皇来学から文化祭を守れ」『戦後』152-1）。
- (96) 同学会「天皇が来ても文化祭を開かせよ！」『戦後』153-1。
- (97) 文学部学友会「文学部学友会委員会決議」（JMHC/Box 71/Fldr 2-1）。
- (98) 井ヶ田良治「天皇来学に当つての随想」『平和のあゆみ』2号、1951年11月6日、京大平和懇談会準備会実行委員会、『戦後』248-10。
- (99) 全官公庁労働組合・京都地方協議会・青年婦人部「声明書（水長宅投石事件の真相）」『戦後』161-1。
- (100) 京都大学同学会「申入書」『戦後』161-1。
- (101) T・K「水長〔水谷長三郎〕宅襲撃時事件について」『嵐について』22号、1951年11月15日、『戦後』250-1。
- (102) 京都大学同学会「申入書」『京大天皇』2-79。

- (103) 前掲「申入書」『戦後』161-1。
- (104) 京都大学同学会「公開質問状」『戦後』161-1。
- (105) 前掲『高橋和巳の回想』84頁。
- (106) 「平和を守れ」『同学会ニュース』2号、1951年11月28日、京都大学同学会、『戦後』159-1。
- (107) 前掲「平和を追い求めた青春」。ただし、文学部や吉田分校担当には十分に連絡が行き届いていなかったとされ、吉田分校正門前にはプラカードが掲げられた。
- (108) 前掲『「京大天皇事件」を語る会 記録集』25、36、37、46～48頁。
- (109) 京大同学会「大学当局は警官侵入の責をとれ」、日本共産党京大細胞「警官を入れたのが悪いのだ!」『戦後』159-1。
- (110) 「我々は今天皇制と四つに組んでいる」『嵐について』26号、1951年12月3日、京大文書館所蔵。
- (111) 「天皇事件の教訓」『嵐について』27号、1951年12月6日、京大文書館所蔵。
- (112) 京都大学同学会中央執行委員会「京大行幸事件について市民の皆さんに訴えます」『戦後』161-1。京都大学同学会・京都大学同学会執行委員会「京大行幸事件の真相と同学会の態度」『京大天皇』2-76。
- (113) 京都大学「十一月十二日京都大学行幸に際し生じた混乱について」『戦後』161-1。
- (114) 「大学を守る会結成」『同学会ニュース』2号。「「大学を守る会について」その性格と任務」『嵐について』28号、1951年12月10日、京大文書館所蔵。
- (115) 京都大学同学会「共同闘争申入書」『戦後』161-1。京都大学同学会「不当な処分に際し全学の皆さんに訴える」『京大天皇』2-27。
- (116) 「学長、教授と共に大学を守ろう」『嵐について』23号、1951年11月19日、『戦後』175-1。
- (117) 京都大学同学会「われら誤ちを克服して勝利に向つて邁進せん」『戦後』159-1。
- (118) 京大同学会「事務所を一時引き上げるに当つての同学会声明」『戦後』159-1。
- (119) 京都大学同学会執行委員会「討論資料=全日本の学生・教授・職員に訴える声明の同学会草案」『戦後』145-5。
- (120) 京都大学同学会「われ等天皇制の強化に反対する（草案）」『戦後』158-1。
- (121) 京都大学同学会「京大生の訴え（草案）」『同学会ニュース』2号。
- (122) 京都大学同学会「嵐を呼ぶ政治」『戦後』145-6。